

## 留学体験記

3年4組37番 浅野友耀

高校二年生の夏から約一年間、私は西ヨーロッパに位置し、イギリスと隣接しているアイルランド共和国のアルスター州モナハン県へ留学した。モナハン県は、アイルランド共和国の北東部に位置し、英領北アイルランドとの国境を有する地域である。人口は僅か6万人ほどで小さな町であった。アイルランドは別名『妖精の国』や『エメラルド島』と世界中で称されるように、緑豊かな世界を360度見渡せ、小さい島国の中には多くの家畜が自由に走り回れるほどの牧場が数千とある。そのような環境と穏やかなアイルランド人の国民性は魅力の一つであるといえる。

そんな土地を選んだのは、他国にはない特有の文化や伝統に惹かれたからである。「アイルランド訛り」と呼ばれる英語の方言は、他の英語の方言とは比較しても仕切れないほどあらゆる方向に独特で、尚且つ最も聴き取りにくい英語の方言であると私は確信している。加えて、国内では多種多様の『アイルランド訛り』があり、一概に「アイリッシュイングリッシュはこうである。」とは言い難いが、共通して隣国イギリスが持つ『訛り』とはよく類似していると私は感じている。

私の留学先のアルスター州モナハンの場合、過去、多くのモナハンの住民はイギリスの主要な港湾都市として栄え、現在では観光都市やロックの聖地として知られるリバプールへ移住した歴史がある。そのことから『訛り』自体のルーツはイギリス本土と比較した時に特に類似しているといえるだろう。以前インターネットで偶然見つけた『リバプールのアクセント』は私の留学中を思い出させた。もしかしたら、リバプールの田舎訛りはある意味『アイルランド訛り』の一つと言えるかもしれない。実際に、リバプールは『アイルランドの真の首都』や『東のダブリン』と言われているように二つの間には共有できるルーツは多くあるだろう。詳しく比較した時に、それらの二地域間の中でもリバプールで話されている語尾のRをあまり発音しない英語に対し、Rをしっかりと発音し、ラップのように素早くリズムをつけて話す。英語初心者には聞き取ることが極めて困難であると云える。

初日、モナハン県に到着した頃、私は初めてホストファミリーと口を交わした。彼らの英語を聞いた瞬間何を言っているのか理解することができず、むしろ英語を話しているか否かすら怪しかった。私は今まで積み重ねたつもりの見せかけの英語は自分自身に対して強い意味を成していないように思えた。特に苦労したのはアクセントだけではない。むしろ彼らの使う特有の言い回しは『英語力向上』という私の脳内を混同させたのであろう。例えば、時に彼らはHOW ARE YOUの代わりにWHAT'S THE CRAICを使うかもしれない。時に彼らはA LITTLE BITの代わりにWEE BITを使うかもしれない。アメリカやイギリス英語しか耳にしたことのない初見の私が理解できる筋すら見つかることはないのは極めて自明的であると言える。少なくとも、スペルリングやアメリカとイギリスで異なる使い回しはイギリス英語からきているのだがいくつかの言葉はアイルランド独特の使い回しが使われているケースが存在している。一例として『警察官』や『警察署』。一般的なアメリカ、イギリス英語では『police officer』や『police station』である。一方で、アイルランド国内で呼ばれている呼び名は『Garda Síochána』である。これはアイルランド固有の言葉で、第一言語であるアイルランド語の『平和の守護者』という意味から来ている。この英語社会の中で、『警察』という日常の中にアイルランド語が使用されている事実に強い影響力を持った大英帝国との歴史が現在のアイルランドの方向を大きく変え英語圏にさせた歴史の痕跡のように思えた。アイルランドが独立するまでの1922年までは、自国の法律を自由に自分たちの権限で制定させることは出来ず、英語教育の強制化があった。その時代はゲール語（アイルランド語）

の自由な使用を禁じられ、彼らは彼らの言葉を禁じられたが、自由を手にしてから『警察』という言葉になぜポリスオフィスにしなかったのかは強い興味がある。アイルランドの美しい自然の過去には数多くの歴史があったのだろう。

また、アイルランドにはゲーリックスポーツとして知られるを国を代表するスポーツが二種類ある。一つ目は、『ゲーリックフットボール』である。このスポーツのゲーリックフットボールは、『サッカー』、『ラグビー』の要素を融合させたアイルランド発祥の独自の球技である。試合は15人ずつの2チームで行われ、選手はボールを手や足で操作してゴールを狙う。得点方法は2種類あり、ゴールポストの上を通過させると1点、クロスバーの下のゴールネットにボールを入れると3点が与えられる。ボールを手で持って移動できるのは4歩までで、それを超える場合はドリブルするか「ソロ」と呼ばれる動作で地面や自分の足にバウンドさせる必要がある。パスは手でパンチするか蹴るの必要があり、直接投げることは禁止されている。サッカーの戦術性、ラグビーのフィジカルプレーが要される。二つ目はハーリンである。ハーリングはゲーリックフットボールと同様に15人で同じフィールドで戦うが、選手は『ハーリ』と呼ばれる木製のバットを使用し、野球ボールサイズのボールをホッケーのように打ち合い相手ゴールを狙う。これらのスポーツを『ゲーリックスポーツ』と呼び、国内ではそれらに特化した巨大なマーケット「GAA」があった。アイルランド国内ではGAAは凄まじい支持を得ており、試合のシーズンになると、街は大勢の人がモニターの前に集まる。市民、町民が一丸となり応援している光景は圧巻であった。

次に私が経験したアイルランドでの学校生活について。印象的だったのは、授業スタイルが日本と大きく異なることである。自教室というものは存在せず、授業ごとに教科書をカバンに入れ早いもの順で好きな席に座って授業を聞く。その時、日本人でもアイルランド人でも後ろの席は当たりで前の席は誰も好んで座ろうとはしなかった。

また、現地のスポーツにも挑戦した。私はゲーリックフットボールのクラブに参加したが、全くの初心者で私を温かく迎えてくれ、練習を通じて友達もでき、現地の人の環境に馴染むことができた。地元の文化やイベントに触れる機会も多く、ハロウィンやセント・パトリックス・デーの盛り上がりは今でも忘れることはできない。実際、10月31日のハロウィンはケルト文化であり、いわゆるアイルランド文化だ。日本みたいに馬鹿騒ぎするだけのハロウィンとは異なり、飾りや祭りが盛大であり、ハロウィン休みといって2週間の長期休みがあった。

アイルランドで一番大切な日と言われている聖パトリックデーはとても驚いた。街に出ると全ての人々が緑の服を着て、緑のお菓子を食べて、町中が緑一色になっており、すごくおどろいた。とても面白かった。アイルランドのクリスマスは日本のように恋人や友人と過ごすのではなく、『絶対家族』というような雰囲気があり、たくさんのホストファミリーの親戚が家に来て日本のお正月のような雰囲気であった。

アイルランドは小さい島国だがそこには綺麗な街がたくさんあった。十回以上訪れることができた首都ダブリンの景色は今でもたまに思い出す。南から北までほとんどの街に足を踏み入れることができた。そしてなんといってもハロウィンやクリスマス、また聖パトリックデーはそこでしか体験できない貴重な体験であった。

帰国後、自分の視野が広がり、英語力だけでなく自分の考えを伝える力も身についたと実感している。アイルランドでの1年間は、挑戦と成長の日々で、貴重な日々であった。